

# 風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

64

2013 秋号

公益財団法人 和歌山県文化財センター

## 特集 和田遺跡の第2次発掘調査



和田遺跡第2次調査1～3区航空写真（南上空から）

# 特集 和田遺跡の第2次発掘調査

## はじめに

和田遺跡の発掘調査は、県道秋月海南線道路改良工事に先がけ昨年度から実施してまいりました。本年度は第2次調査として5月初旬から8月下旬まで4,548m<sup>2</sup>を発掘調査しました。

昨年度に実施した和田遺跡第1次調査の概要については「風車62」をご覧ください。なお、遺跡の位置等についても既刊号で記していますので詳細な記述は控えさせていただきます。

本年度の調査地は、第1次調査地の南側の続きの新設道路敷き部分です。調査地の中央には和田地区を灌漑する現有の用水路が流れています。

調査地は現状の水田区画を基にして4区画を設定し、調査は残土置き場の都合上、反転調査としました。

## 検出遺構

調査地の基本となる堆積土は、現地盤から下方向に現耕作土、床土、地山となります。遺構は標高約1mの地山上から検出されました。検出された遺構の深さから推し量つて、この辺りは全体的に後世に著しく改変（削平）されたと考えられます。1区と2区は2面の遺構面、3区・4区については1面の遺構面を調査しました。

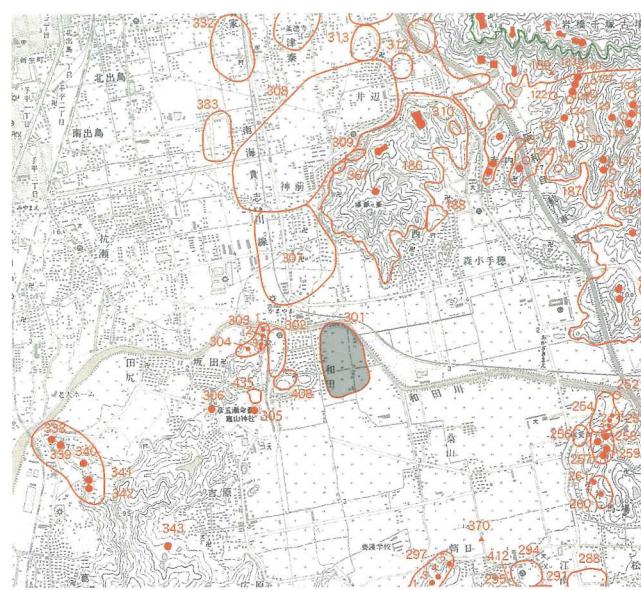
以下、調査区毎に検出した主な遺構について記述します。

### 【1区・2区】 上面では2基の土坑状遺

構、下面では2条の旧河道跡を検出しました。旧河道と言うのは、昔、堤防もなかつた時代に縦横に流れていた川跡をイメージして下さい。



調査位置図 (S=1/5,000)



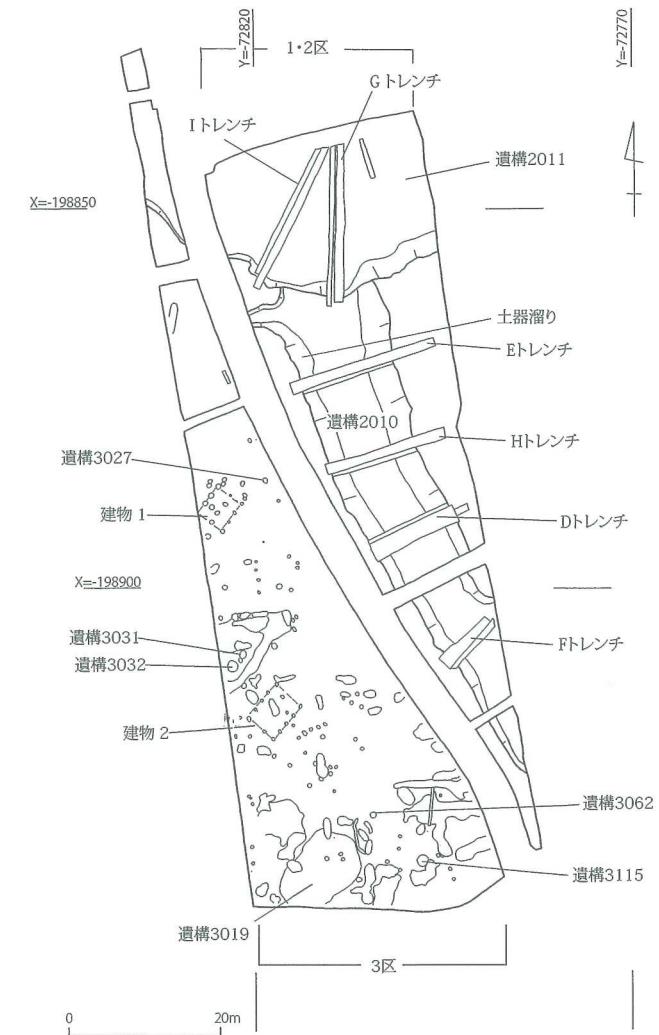
遺跡位置図 (S=1/50,000)

上面で検出した2基の土坑状遺構（2003・2005）は、双方の遺構の埋土の堆積状況や規模から判断して同様な性格の土坑と判断できます。双方ともに平面形上はほぼ円形を呈し、大きさは直径0.8～1.0m、深さは0.5mです。埋土はレンズ状に薄く堆積し、4～6層に分けることができます。

埋土の中位あるいは底付近の層には炭の層が確認でき、一見、竪穴建物の炉跡と勘違いをします。このため、調査時には周辺を精査して竪穴建物の痕跡を探しました

が、確認することはできませんでした。炭の層が堆積していることから、暖をとった遺構と考えられます。

下面では2条の旧河道跡（2010・2011）を検出しました。遺構2010は2条検出した内の古い方の川跡で、北側では遺構2011と重複します。遺構2011は62号に掲載しました1次調査の遺構205とした落ち込み遺構と同一のものでです。遺構2010の幅は12～14m、深さは約0.5mです。ここからは弥生時代中期（約二千年前）の土器が出土しました。遺構2011



遺構配置図（1・2区第2遺構面、3区第1遺構面）

は本年度の調査により南側の肩（落ち込む箇所）が見つかりました。この川は遺構2010よりも新しく、1次調査で見つかった北側の肩と今回検出した南側の肩から幅を推測すると約30m以上になり、深さは約0.6mです。この川跡からも主に弥生時代中期の土器が出土しましたが、上層からは古墳時代の土器も出土しました。

なお、これらの川跡を調査するに当り、調査区内に6本のトレンチを設定し、下層（川底より下の堆積層）確認をしました。



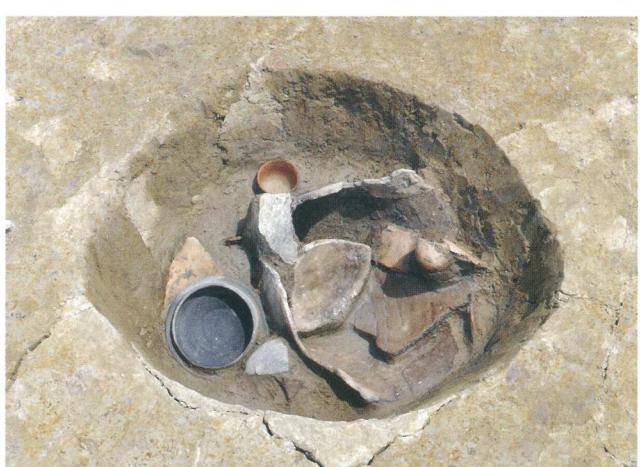
1・2区 遺構2010・2011（旧河道跡）

その結果、下層には流木や枝などの有機物を含んだ粘土層や砂層が堆積しており、弥生時代中期の広口壺などが出土しました。

**【3区】** この地区では、弥生時代中期の土坑状遺構、弥生時代後期の井戸跡、古墳時代の掘立柱建物跡や土器埋納遺構、奈良時代の井戸などの直接人間の生活に関わりを持つ遺構が見つかりました。

遺構（3019）は調査区の南端で見つけた土坑状遺構です。平面形状は橢円形を呈し、大きさは直径約7.3mと大きく、深さは0.1～0.15m

と浅いものです。ここからは投げ込まれたような状態で弥生時代中期の土器が大量に出土しました。いわゆる、当時のゴミ捨て場と考えられます。調査区中央西寄りで素掘り井戸（遺構3022）を検出しました。平面の形状は直径約1.4mの円形で、深さは0.9mが残っていました。この井戸の中には、褐色や灰色のシルト質／粘土質の土が埋まっており、底の灰色粘土からは弥生時代後期の壺の破片などが出土しました。また、調査区の中央西側では古墳時代の掘立柱建物を2棟検出し



ました。掘立柱建物と言うのは、礎石などを置かずに地面に直接穴を掘って柱を立てた建物のことです。建物1は桁行3間×梁行2間の大きさで、建物2は桁行4間×梁行3間と見えられます。これら2棟の建物は、同一の方向を示すことから同時期の建物と考えられます。因みに、建物の規模を表すには、柱と柱の間を1間と数えます。他に検出した古墳時代の遺構には、土器を埋納した土坑状遺構2基（遺構3027・3062）があります。これらの遺構からは、完全な形の須恵器杯身

や土師器椀、ミニチュア土器が出土しました。

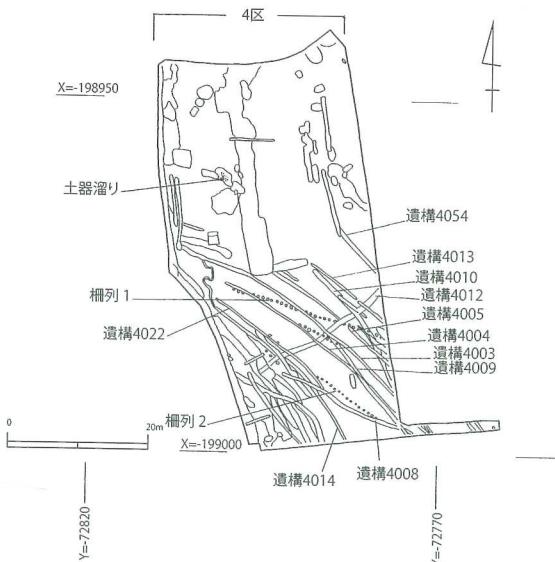
祭祀に関わる可能性があると考えられます。

調査区の南端東寄りの地点では奈良時代の井戸（遺構315）を検出しました。井戸の掘形は直径約1.5mの円形で、深さは1.3mです。

掘形の中には直径0.5mの木製の井筒が設置されていました。井筒は丸太材を縦に半裁し、それらを割り抜き、端にホゾ穴を穿ち結合していました。井筒の底からは土師器の薬壺や甕が出土しました。

#### 【4区】

この調査区の南半部で北西から南東に流れる溝状遺構群を検出しました。これらの中には、数条の溝（遺構4003・4005・4009・



遺構配置図（4区第1遺構面）



紡錘車



石包丁



4区 溝状遺構群

4013・4022）はほぼ同じ間隔で、同方向に流れています。このように規則性を持つていることから、用水路的な性格の溝と思われます。

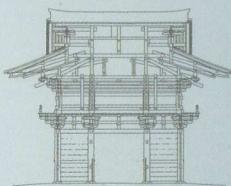
## まとめ

今回の調査で検出した主な遺構は、弥生時代、古墳時代、奈良時代のものでした。

冒頭に記したように、調査地の中央を現有の水路（用水路）が流れしており、この水路を境にして、東側と西側で遺構の様相が大きく異なることが分かりました。水路より東側（1区・2区）では弥生時代・古墳時代の旧河道が検出され、西側（3区・4区）では弥生時代の井戸、古墳時代と考えられる掘立柱建物や奈良時代の井戸などの直接生活に関わる遺構が検出されました。

このようなことから和田遺跡における先人達の居住域は、調査地の西側に存在する独立丘陵である、天霧山（通称薬師山）の裾野から放射状に派生する微高地に求められます。従って、今回の調査地の西に展開している現在の和田地区の集落域と大差のないものと考えられます。

（佐伯和也・山本光俊）



## 熊野本宮大社の保存修理

田辺市本宮町にある熊野本宮大社では、平成二二年、同一三年で重要文化財である社殿の檜皮屋根、同二四年には神門の檜皮屋根、築地塀と神饌所の銅板屋根の葺き直しを実施し、同二五年は瑞垣と鈴門の檜皮屋根の葺き直しを行っています。

この紙面で紹介して来ましたとおり、社殿は明治三二年（一八八九）に大斎原を襲つ

た水害で流失を免れて、同一四年（一八九二）に現在の社地へ遷座された建物です。神門と築地塀、瑞垣と鈴門は、明治遷座時に新築された建物ではありますが、神門や鈴門の部材の一部には大斎原で被害を受けた境内建物の部材が再用されています。当時の記録にある「在来古ノ内ニモ使用ノ分モ有」といった内容の裏付けにもなります。

とりわけ神門の小屋組で確認された古材には、現在の社殿と並び立っていたとみられる建物の部材も多く含まれ、遷座当時の様子がうかがい知れる気がします（写真1）。

瑞垣の屋根は、社殿や鈴門と同じ檜皮葺きとなっていますが、明治遷座時は厚さ三ミリ程度の杉の薄板を使って葺いた「こけら葺き」でした（写真2）。昭和二六年（一九五二）の台風で、鈴門とその間の瑞垣が倒れるほどの被害を受けました。その際の修理は、倒れた建物をそのまま建て起こし、内側の控え柱を補強して転倒防止策を講じた他は、破損部分を取り替える程度

であったことが、今回の修理の中で確認できました。明治遷座時の姿を概ね今に留めており、神門や築地塀と合わせて、社殿を囲む結界としての役割を百二十年の間変わらずに担つて来ています。

十一月末頃には瑞垣と鈴門の覆屋が外される予定です。引き続き細かい修理作業は残りますが、半年ぶりに社殿を中心とした境内の雰囲気をご堪能いただけるだろうと思います。

（下津健太朗）



写真1 神門の小屋組で転用されていた隅木

小屋組内には軒先の垂れ下がりを軽減するための「桔木（はねぎ）」が入っていますが、その一部には隅木（すみぎ）や茅負（かやおい）などの軒先に使われていた部材も使用されていました。

これらの部材は表面に泥土が付着しており、明治22年の水害で倒壊・流出した建物の部材が再用されたものと考えられます。



写真2 鈴門・瑞垣の古写真

御本殿、鈴門、瑞垣を南西から見た写真で、今回の修理で行った調査から昭和26年台風被害以前の状況を写したものと考えられます。

瑞垣の屋根面を見ると、葺き材による段差が確認でき、明治遷座時の記録にある通り、「こけら葺き」であったことがわかります。

## 古建築修理の逸話⑥ 六枝掛け

ろくし  
が

社寺建築の柱の上には、民家などではあまり見かけない複雑に組みあげられた部材が載せられています。それは組物と呼ばれ、上部が四型に加工された『斗』と棒状の『肘木』を幾重にも組み合わせて軒を支えます。構成する部材は、一番下で全ての部材を支える『大斗』、肘木を柏餅のように包む『巻斗』、十字に組まれた『枠肘木』など、それぞれの位置や用途によって使い分けられています。また組み方も大斗と肘木が三つの巻斗を支えるだけのシンプルな『平三斗』から、手前に三段せり出す『三手先組み』までさまざま。本来軒を支えるための構造部材である組物は、次第に建物の莊嚴さを表現する装飾的な要素を高めていきます。

奈良時代の建物ではその特徴的な深い軒を支えるための創意工夫がみられ、建物ごとに様々な納まりが見出せます。これが平安・鎌倉時代と時代を経るにつれて整備が進み、形式として完成していったと考えられます。その成果を一目で確認できるのが「六枝掛け」です。組物の最上部で三つ並んだ巻斗の一番端は、六本並んだ垂木のそれとぴたり重なります。大きさも性格も異なる部材を破綻なく納めるのは至難の業ですが、これを一つの基準として建物を構成する様々な寸法が整然と決められていくのです。

大陸から伝わったダイナミックな形式を積極的に取り入れながら、次第に洗練を重ね独自の文化を熟成してゆく。今の日本にもつながる血脉が、古建築の小さな部材に見出せるのです。

(多井 忠嗣)



福勝寺本堂（海南市：室町時代）  
大ぶりな部材が整然と納まっている。

## きのくに歴史小話

～きのくにれきしこばなし～

いつのまにか彼岸花が咲き、空には鱗雲。長かった夏もようやく終わりました。それにしても今年の夏は暑かつたですねえ。

その暑い最中に年甲斐もなく現場に出ておりました。紀ノ川の中流域、かつらぎ町に所在する東渋田遺跡。意外に思われるかもしれません、夏、和歌山で一番涼しいのが本州最南端、潮岬を擁する串本町。逆にもつとも暑くなるのがこのかつらぎ町です。先だって四国の四十市江川崎で41℃という国内最高記録を出して話題になっていましたが、かつらぎ町も捨てたものではありません。忘れもしない平成6年8月8日、この日もかつらぎ町で調査をやっていましたが、最高気温40.6℃を記録。いまだに国内歴代6位です。

それでも夏の発掘は暑さとの戦いと言つても過言ではありません。発掘と言うとTV等の影響か、一般の方々は小さなスコップや刷毛でちょこちょこと土を取り除いていくきわめて軽微な作業を連想しがちですが、そんなことはありません。手で掘る土の量は一般の土木作業員の比ではありませんよ。ここはひとつ全国の発掘屋を代表して声を大にして言つておかねばなりませんね。「刷毛だけで遺跡が掘れるか！」

発掘と言う仕事に就いたことを後悔するときが二つあります。ひとつは確実にこの夏の暑さです。なにしろ過酷ですよ。この夏、小生の現場では三人が熱中症で倒れました。炎天下、ツルハシを振るい統ければ意識朦朧。図面を書いていても思考力停止状態。そうした中で、なぜ好んでこんな職業に就いたのかとひとしきり後悔します。(ただ困ったことに、発掘にはそれに倍する魅力があるんですね。だから三十五年余もつづけてこられたのでしょう。)念のために、もうひとつ後悔するときを記しておけば、これはもちろん給与明細書をもらつたときですね。このうな垂れ具合は夏の暑さの比でありません――。

## 発掘屋余話② 発掘屋の夏

(村田 弘)

# 催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報（2013年秋～2013年冬）

## 和歌山県立紀伊風土記の丘

- 特別展「那智田楽へのいざない」 2013年 9月 28日(土)～12月 1日(日)
- 冬季企画展「馬」 2013年 12月 21日(土)～ 2月 9日(日)

## 和歌山県立博物館

- 企画展「紀伊国桂田荘と文覚井—水とともに生き、水を求めて闘う—」  
2013年 10月 26日(土)～12月 1日(日)
- 企画展「仮面の諸相—乾武俊氏の収集資料から—」  
2013年 12月 7日(土)～ 1月 19日(日)

## 和歌山市立博物館

- 特別展「市電が走っていた街—開業から廃止まで—」 2013年 10月 19日(土)～12月 1日(日)

## 高野山靈宝館

- 秋期企画展「徳川家と高野山」 2013年 9月 28日(土)～12月 15日(日)

## (公財) 和歌山県文化財センター

- 「シンポジウム 紀ノ川北岸の古墳文化」 2014年 2月 1日(土)  
きのくに志学館 講義・研修室(和歌山県立図書館 2F) 13:00～

掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

### 目次

- 1 表紙 和田遺跡第2次調査1～3区航空写真(南上空から)
- 2 特集 和田遺跡の第2次発掘調査
- 7 きのくに歴史小話「古建築修理の逸話⑥六枝掛け」「発掘屋余話②発掘屋の夏」
- 8 催し物案内

## 風車64 (2013・秋号)

平成25年11月8日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp>

(公財) 和歌山県文化財センター

【事務局】

〒640-8404 和歌山市湊 571-1  
TEL 073-433-3843 FAX 073-425-4595  
maizou-1@wabunse.or.jp